

刈谷東高校

「名古屋—新大阪」

2018. 12. 25 上演4

場所は、新幹線の中。車内には乗客がいて、その乗客たちは時折立ち上がり、黒い台本に書かれた自らの身の上話をしていく。その中にいる「姉」は2人で暮らしてきた「妹」を自分の幸せを叶えるために、叔母の家に受け渡しに行こうとしている。

舞台装置はパイプ椅子が座席のように並べられているのみだ。そこに、乗客の細かな動作や、走行する新幹線の車内の音加わることで、その場面設定が伝わってきた。そんな中、この劇の独特な空気を作り出していたのは、黒い台本の存在だ。それぞれが自分の台本を持っている点から、これは、各人が「乗客」として座っている裏にある人生なのではないかという意見が挙がった。乗客はそれを読み上げるときに、感情的にはならず、強く、しかし淡々と読む。この表現方法から、自分を主張したい気持ちとは裏腹に、周りの客にとってそれは意味をなすものではないことを読み取ることができた。また、乗客はみんな自分を取り繕っていることを表しているという意見も挙がった。物語の中盤で一曲まるごと流れた音楽と、それに合わせて繰り返される乗客の身体の動きについては、それぞれが取り繕っている本性だ、葛藤だ、抜け出せない日常だなど様々な意見が挙がった。それと同時に、この劇では観客による異なった受け取り方が前提されているのではないかという考えもあった。また、車内に転がった檸檬がスポットライトで照らされた時、転がったままの姿から周りに関心がない乗客を強調する効果があったという意見が挙がった。さらに、梶井基次郎の『檸檬』に関連して、それが爆弾に見えたという意見も生まれた。そこから、妹が檸檬を置いて新幹線を降りる行為は、車内のわだかまりをぶちこわそうとしたのだと考えられた。物語の最後、新幹線が新大阪に到着した時に客席側に向けられたスポットライトの演出も印象的だった。これは、観客も黒い台本を持った演者の一人であることを表していると受け取ることができた。さらに、その光が劇場の出入り口に当たっていたことから、自分たちもこの劇が終われば外に出ていく他人であることを感じたという意見もあった。「決して特別な話ではない」「作り物ではない」という印象を与えさせる作品だった。

他人だけでなく家族にさえ自分をわかってもらえない現実を、「悲しい」「むなしい」「切ない」という印象を受ける人や、「それで当たり前だ」と思う人がいた。偶然居合わせた他人に関わろうとしないのは仕方ないと納得しつつ、理解してほしいと思ってしまう人もいた。人間が作り出す社会を批評するわけでもなく、ただ一緒にぼうっと眺めているような気持ちにさせるような劇だった。